論　文

民族音楽の現代化の背景にある文化装置

――〈女子十二楽坊現象〉をめぐって――

仲　　万美子
学芸学部・音楽学科

Abstract

In my research, I have examined the cultural mechanism behind the phenomenon of the Twelve Girls Band in order to better understand the conspicuous transformation of ethnic music into popular music which has occurred in East Asia since the 1990s. In particular, I have concentrated on the following topics within a cultural and social framework: 1) the training of professional players of ethnic instruments; 2) the musical style of ensembles which use ethnic instruments; and 3) the promotion of the music towards the world by producers.

はじめに

20世紀、「民俗・民族」音楽をとりまく環境は、各種メディアの発展ともあいまって、大きく変貌を遂げてきた。そしてワールドミュージック、グローバル化などの文化現象に巻き込まれながら、東アジアの民俗・民族音楽も、それらを本来演奏する場とは異なる上演空間で、その音楽活動が展開されるようになった。そしてその変化を反映するように、ポピュラー音楽の研究を中心とする日本ポピュラー音楽学会（略称JASPM）でも、個別には伝統音楽（民俗・民族）とポピュラー音楽との関係を探る研究成果が発表されてきた。

また、平素、音楽を専門に研究していない人々も、日常生活あるいは仕事上でも、意識的あるいは無意識のうちに、民族（俗）音楽のポピュラー化された音楽を耳にすることが多い。

The Cultural Mechanism behind the Modernization of Ethnic Music: The Phenomenon of the Twelve Girls Band

こういった民族音楽の現代化の現象は、ポピュラー音楽としての素材、発信者あるいは受信者、メディアの力など多角的な論議が必須であり、当然、学際研究の対象となるテーマでもある[1)]。

本稿はその学術研究としての一試論であり、3年前に彗星のごとく日本の音楽市場に登場し、活動の場を世界に広げていった「女子十二楽坊」およびそれに続く「東方女子楽坊」「女子国楽坊」「音楽猫」などのグループと比較しながら、この〈女子十二楽坊現象〉とも呼べる動きの背景を、中国の文化脈絡に位置づけて考察を試みるものである。

1　20世紀末に出現したワールドミュージック化現象と民俗・民族音楽

「ポピュラー音楽」という名称が示す内容は、非常に幅広い意味をもっている。1993年に長野で開かれたJASPM大会で、小川氏や岩村氏らのセッションで、「〈民謡〉も広く大衆に受け入れられている音楽と解釈するなら、ポピュラー音楽だ」という提言がなされた（岩村1993）。となれば、2005年度のワークショップ

で取り上げられた〈しまうた〉、〈津軽三味線〉、そして〈女子十二楽坊〉の音楽も、民俗音楽や楽器を軸にしておりながらも「ポピュラー音楽」という傘の下に並列させうると考えられる。

2005年度第17回大会ワークショップのテーマとしては「民俗音楽のポピュラーミュージック化」という方向軸が示されているが、それぞれがすべておなじ土俵の上に立脚しているのかそれとも、そこには差異があるのか、あれば、どのような特質があり、その背景には何がかかわっているのかを、整理して考察する必要がある。そして、その答えが引き出せれば、それは、ここ10年の「ポピュラー音楽」を取り巻く、あるいは生みだした文化現象の特質を浮上させうることが可能となる。

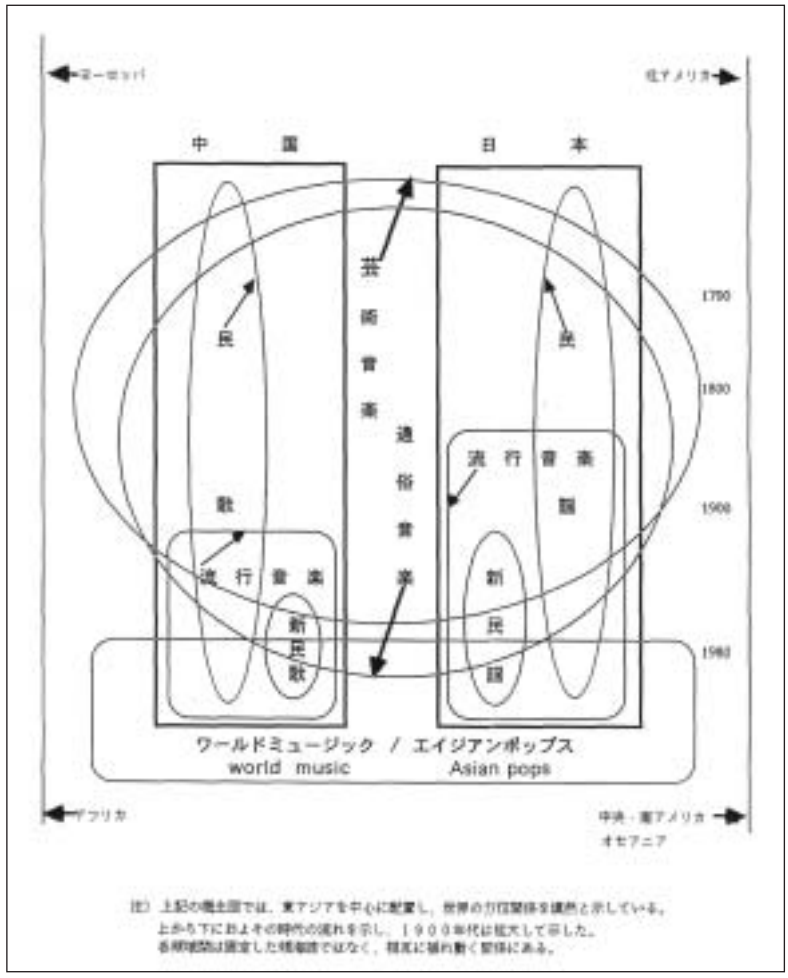
さて、下記にあげた図1は、10年前に国立民族学博物館主催で開催された国際シンポジウム「文部省国際シンポジウム　アジア諸民族音楽文化のダイナミズム —— 伝統と変容」において、筆者が報告した「『通俗音楽』および『*民歌*』『民謡』概念のダイナミズム —— 中国・日本における研究（創作）活動の流れ」で、中国と日本における通俗音楽と民謡の概念の変遷を示したものである。これは、当時、ワールドミュージックの風にのって「エイジアンポップス」の名称のもとに、両国のポップスが世界市場に進出しはじめたことも対象枠内に収めて俯瞰するために作成したチャートである。その時点では、当然、その後の十年は未知なる世界であったわけだが、〈民族・民俗音楽〉と〈ポピュラー音楽〉は、その後、どのような接点をもった動きをみせたか。本稿で取り上げる〈女子十二楽坊現象〉の考察は、その一端を探る上でも重要なポイントとなると考えている。

当時、日本の音楽市場では、日本の東京からの発信されたThe　Boomによる《島唄》が大ヒットし、NHKの日曜夜の大河ドラマ「琉球の風」の放映もあいまって沖縄ブームが再燃し、南のウミンチュからは民俗楽器と沖縄方言を重視した「リンケンバンド」や「初代ネーネーズ」がヤマトンチュに向かって大躍進していた。その後、一端は、アクターズプロ系のポップスが幅をきかせ、民族・民俗音楽系の軸に収められる沖縄ポップスが影をひそめていたかのようにみえていた。しかし21世紀に入り、今度は「癒し」ブームに足並みをそろえるかのように、再びNHKの朝の連ドラが火付け役となり、沖縄ポップスが席巻している。

また、一方、日本の北から発信される「津軽三味線」が音楽市場でとりあげられるようになった。すなわち初代高橋竹山から二代目竹山への継承、そして、やはり21世紀に突入し、吉田兄弟がリリースしたCD《いぶき》が純邦楽の世界では考えられない売り上げを見せ、一気に津軽三味線のブームが巻き起こった。さらに、テレビでも盛んに取り上げられるようになり、普段クラシック音楽を主に勉強していた音楽系女子大学生の耳にもそのサウンドは強烈なインパクト与え、「津軽三味線の追っかけ」をし、卒業研究のテーマにまで結び付ける程になった。本ワークショップで提言者の一人となった山田由貴子氏も、本学学芸学部音楽学科音楽文化専攻音楽文化コースの卒業研究のテーマ（山田　2005）に津軽三味線を取り上げた一人である。

一方、中国では1990年代前半は、音楽視聴の媒体としてカセットテープが主流であったが、後半に入るころから、台湾、香港などのミュージシャンの音楽が流入し始め、都市部を中心に、高価なCDが店頭にならびはじめた。そして21世紀には一気に、VCD、DVDへと音楽店の風景を激変させている。そして、そこにはロックはもとよりインディーズ系のバンド、癒し系の音楽CDがところせましと並ぶようになった。その、一角に突如として日本で人気沸騰となった「女子十二楽坊」、そしてその続編バンドのCD，VCD，DVDが肩を並べて配置されるようになったのである。

このように、この10～15年の間に、日本、中国の音楽シーンに、民族・民俗音楽をベースとしたポピュラー音楽が大きな位置を占める事例が見られる。



（出典：仲　1996 a）

図 1　1990 年代中期までの日中の民謡の変遷

では、次章では、〈女子十二楽坊現象〉の特徴について、中国の文化的・社会的脈絡に位置づけながら、その文化装置がどのように、この現象を生み出したかについて考察する。

2　〈女子十二楽坊現象〉を生み出した文化装置とは

2－1　21 世紀までの民俗・民族音楽の流れ

文化だけでなく様々な分野で、「中国という地域や市場」が注目されるようになったのも、この十数年ではないかと思う。1990 年代初めに、前述のように中国の音楽市場で中心的なソフトはカセットテープであり、急速な経済成長と共に、21 世紀に入り、一気に一般大衆の娯楽音楽の市場に CD や VCD が流入し、台湾、香港だけでなく中国大陸のポピュラー音楽のパフォーマーが登場するようになった。

そして 21 世紀に入り、中国から日本や世界に向けて発信をしている「女子十二楽坊」、「東方女子楽坊」「女子国楽坊」「音楽猫」など、プロの民族楽器奏者を主体としたバンドが急浮上してきたかのように日本人からみると思われが

ちである。しかし、20世紀、積極的に西洋音楽と接触してきた過程において、複雑な文化的・社会的脈絡のなかで民族音楽を取り巻く状況が変化してきたことが、大きくかかわっているといえる。

以下、この〈女子十二楽坊〉現象が起こるまでを、簡単にみておく。

2－1－1　1990年代までの流れ

二胡や笛などの民族楽器は、いうまでもなく長い歴史を持ち、民衆の生活の傍に存在していた楽器である。冒頭にふれたように、岩村氏らの提言にそうならば、長い歴史をもつ〈ポピュラー音楽〉だといえる。ここでは、〈西洋音楽〉と遭遇したころからの流れのなかで重要な変化をしめしたポイントを見ておくことにする。

中国では、清代が幕を閉じ、中華民国が成立した後、北京大学の関係者によって大きな〈*民歌*（民謡）〉研究の運動が推進された。同大学歌謡研究会は、劉半農や周作人らによって運営された研究会であるが、中華民国11年12月17日より週に1度日刊誌に添付する形で『歌謡週刊』を創刊し、口頭伝承されてきたものを文字に書き留めて保存するために主にテキストを収集することを目的として、民謡や童謡の研究を推進させた。また、北京大学では学長蔡元培によって、音楽を専門に研究する方面にも道が開かれ、1919年に音楽研究会が創設され、西洋音楽と伝統的な音楽の両方が教授されるようなった。また1927年には、上海に中国最初の国立音楽専科学校を蕭友梅と一緒に設立した。彼の音楽教育活動への関心は、西洋音楽受容にも大きな力となったのである（仲　1993、1996、東　1994）。一方、蔡は民族学者でもあり、1907年、ドイツのライプチヒに留学し、哲学、文学、文明史、民族学を学び、帰国後、民族学的調査をおこない、1928年以降は中央研究院院長を務め、少数民族の調査研究を推進した。広西凌雲揺族、台湾高砂族、松花江下游赫哲族、西南小数民族をはじめ、世界の各種の民族名称や原始文字の研究を推奨した。その成果の一つである『松花江下游赫哲族』の著作では、音楽に関する記録や、五線譜による採譜も含まれている。また、民間歌謡の伝承にも関心を持ち、歌詞だけでなく、五線譜、工尺譜、数字譜に採譜することを進めていた（仲、1996）。

このような民俗音楽だけでなく、伝統音楽の「俗楽」も、記録化された。すなわち清の時代までその俗楽の合奏用に使用されていた二胡は、20世紀初頭、劉天華（1895～1932）によって、西洋音楽の理論やバイオリンの奏法が取り込まれ、独奏楽器としての花をさかせた。そして広く一般大衆に受け継がれてきた音楽が、楽譜に書きとめられるようになったのである。

上記のような先駆的動きに続き、中国では国内の動乱や日本との戦争勃発によって、民衆の心に訴えかける音楽の役割もおのずと、社会体制の歩みと同方向をとるようになったのである。

民謡研究を推進した人物としては、冼星海（1905－1945）は、1935年フランス留学から帰国後、1940年に延安で発刊された雑誌『中国文化』に「民歌与中国新興音楽」（冼　1989）の長大な文章を著し、民謡研究を大きく展開させようとした。かれは、そこで新しい民謡を創造するために、民衆の生活に深く入り込んだ調べと歌詞を正確に調査し、和声や対位法を用いて民謡を現代化させ、集団の力を用いて創作することなどを提唱した。また、ベートーヴェンをはじめヨーロッパ各国の芸術音楽の中に民謡の転用されていることにも言及している。

このように、民衆の身近にあった俗楽や民謡が、西洋文化と遭遇し、西洋で学んできた人物により、口頭伝承されていたものが五線譜などに記録されるようになり、さらに西洋音楽の事例に学びつつ、演奏や創作[2)]を含めて異なる空間にも進出する動きが見られるようになったのである[3)]。

そして新中国成立（1949年）前後には、新しい動きも登場してくる。新歌劇運動がおこり、民話と民謡を基に作られた《白毛女》が集団創作され、1944年魯迅芸術学院文工団によって延安で初演され、以後、世界に名を馳せた作品

となった。西洋のオーケストラ編成を模倣した、民族楽器だけによる大型合奏音楽が登場し、低音域をカバーするため、楽器の改良も積極的に行なわれた。広く巷に響いていた民楽が西洋楽器の合奏形態との類似性をみせ、上海はもとより、北京、西安、四川などの各地の音楽学院（音楽大学）や演奏会場という場に持ち込まれるようになった。

そして1966年には文化大革命が起こり、様々な音楽シーンに「停滞」をもたらすことにもなった。そして1976年改革解放後、一部には継承者の断絶を余儀なくされていた民俗音楽の復興がめざされ、音楽学院でも、西洋クラシック音楽と並存する形で、民族音楽のプロを養成するカリキュラムが遂行され、音楽大学の付属小学校から大学へという一環体制で人材の育成が展開されてきた。これは、全国的展開をみせ、いわゆるバイミュジカリティの奏者を育てることにもつながったといっても過言ではない。日本の場合は、民族楽器はまったく演奏できない西洋楽器のプロ奏者が輩出したが、現時点での中国では、両刀ずかいの奏者が存在し、そういう意味では西洋音楽と民俗音楽のボーダレス化を促進させる大きな素地を形成しているといえよう。

しかしながら、この次世代（現代）を担う若手演奏家（本稿次節で取り上げる〈女子十二楽坊現象〉に登場する、現在20歳前後の担い手）が育つ一方で、民間でおこなわれている芸能では、その担い手の断絶は如実であり、言うまでもなく問題を残していることも否定できない。2005年8月、陝西省関中地域、陝南地域に、民族楽器を伴奏とする伝統芸能皮影戯の調査に同行した際、その現場でもそれを目の当たりにした。陝南地域の漢陰県浦渓両合崖観音閣で、8月21日、上演された際の、漢陰県浦渓両合崖観音閣皮影小戯の鼓師（皮影戯団の伴奏者）の年齢をみても、上は84歳そして下は60歳の4人であった。調査団のインタビューでも、1949年以前はほぼ、毎日上演されていたが、文革後1979年に復活、現在は年20回ほどの上演となっている[4)]。

現代化の流れのなかで、このように、広大な土地そして多くの民を抱える中国では、都市部と近郊農村との芸能の上演の担い手や上演回数の変貌はよく見られる現象ではあるが、民族楽器や民族（民俗）音楽が鳴り響く割合は薄れていく傾向にあることは否定できない一面である。

日本在住の中国人張競氏が、『文化のオフサイド／ノーサイド』に再録された、1996年に公刊された「メディアの文化大革命」の冒頭部で次のように語られている（張　2004：3）。

> （前略）十年まえ上海を離れたとき、ひとりの姪は小学生で、もうひとりはまだ幼稚園児であった。首にネッカチーフをして、革命的な童謡を歌っていた。しかし、いま目の前に立っているのは、香港の流行歌に夢中になっている現代ギャルである。しかし、変わったのは二人の姪だけではない。十年ぶりに上海に帰って、もっと驚いたのは若い世代の変貌ぶりである。ディスコでは、回転するレーザー光線と、ミラー・ボールのキラキラする反射光のなかで、大音量のロック音楽にあわせて屈託なく体をくねらせ、踊り狂っている。（後略）

この経験は、筆者にもある。すなわち1982年に初めて中国北京、上海、西安などを訪れ、そして、10年後91年の2度目の訪中、そして92年から1年余りの研究のため上海に滞在したとき、実感した。さらに90年代半ばにかけ、毎年でかけ、そして2004年に久しぶりに上海、福州、泉州方面、そして2005年夏に西安、北京の地に立った。本稿でも前述したように、音楽店やTVなどから流れでる音楽の響きの変貌は、簡単には筆にできないほどである。

このような1980年代から90年代に突入し、音楽シーンは大きな変貌を遂げて行くが、とくに本稿の主題とかかわる民族楽器が取り込まれたポピュラー音楽の事例について、次項でふれておく。

2－1－2　1990年代以降のポピュラー音楽作品における民族楽器の取り込み

本項では、1990年代のポピュラー音楽に民族楽器が取り込まれている事例を簡単にみておく。

1990年代以降のポップス界における、民族音楽とのハイブリッド化は一気に促進されてきた。その中での大きな特徴の一つとして、ライブコンサートのプログラミングでも多様なジャンルの混在が見られた。これは、ある意味、日本の明治期にひとつのライブコンサートで、純邦楽と西洋音楽を並列させたプログラミングが行なわれていた状況（仲　2000）と類似した現象と考えられる。すなわち中国では、‘90年代前半には、体育館など大きな会場でのポップスのコンサートでも、ポップスだけでなく、いわゆる民謡歌手、民族舞踊、クラシック、ポップスが混在するプログラム編成がなされている。

次に、1つのジャンルに、素材として民族音楽（具体的には民族楽器）の取り込みが行われた事例として、ロックバンドでも其例をみることができる。日本でも発売され、1993年2月にベルリンで開催された「中国の前衛」での中国ロックバンドのライブ演奏にも民族楽器が取り込まれたものが含まれている。ツイ・ジェンのバンドのなかでも古箏が使われており、また、ワン・ヨンは自ら古箏を演奏し、ギターやシンセサイザーの音との融合を図っている。また女性ロックバンド先駆者、「コブラ」のメンバーも伝統楽器の学習経験がる。このようにこれらの世代のミュージシャンには、伝統楽器の演奏経験者があるが、これは、これからの世代のミュージシャンとの違いとして注目すべき点として継続観察が必要かと思われる。

21世紀に入ってからの事例としては、民族楽器を持ち込むだけでなく、むしろ東北地方一帯に定着している二人転という芸能そのものをバックボーンにして、それを特長として売り出した東北出身のロックバンド「セカンドハンドローズ」の例がある。

以上は、ロックバンドの事例を取り上げたが、中国国内だけでなく、日本や世界への挑戦を果たし成功を収めている芸術音楽の音楽家の事例を挙げておきたい。現在、世界で5本の指にはいる作曲家であり、その新作、一作一作が注目をあびる委嘱作品を残しているタン・ドゥン（1957－　）も、音楽ジャンルを越境させる創作活動を行っている。彼は、西洋現代音楽に民族楽器を取り込み、また、1990年代から水や紙など従来の「楽音」ではない音素材に着目し、多くの実験音楽を生み出した（仲　2005a）。そして21世紀にはいり、映画音楽のジャンルでも、アカデミー賞・グラミー賞に輝いた《グリーンデスタニ》では二胡が、また《HERO》では日本の鼓童そして遺跡から発掘された古代楽器の編鐘なども取り込んでいる。

以上のように、様々なジャンルで、民族楽器が注目され、それぞれのジャンルで、西洋楽器と並存する形で、その存在感を示す事例を多く生み出してきた。

次節では、〈女子十二楽坊現象〉について、その特質について考察する。

2－2　〈女子十二楽坊〉など女性グループ（CD，VCD，DVD）の売り込みのための戦略の特徴

現在、彗星のごとく日本の音楽市場に登場し世界へと活動を展開している「女子十二楽坊」、そしてその「女子十二楽坊」に続くグループとして「東方女子楽坊」「女子国楽坊」「音楽猫」などが次々と登場してきた。本節では、その各グループの売り込みの切り口を、収録曲およびメンバーの構成、担当楽器、コスチュームに焦点をあて簡単にその特徴を考察しておく。

表1は、現在の時点で、私が入手した「女子十二楽坊」「東方女子楽坊（C-gal）」「音楽猫」「女子国楽坊」の中国および台湾発売分と日本発売分などのCD、VCD，DVD一覧である。これからもわかるように、重なる楽曲はあるものの、各グループの中国内・外限定版で、それぞれの版にも収録された作品もふくまれている。

基本的にはどのグループのものにも、「民謡」

表１　女子十二楽坊現象にかかわる視聴覚資料一覧（１）

作成：仲　万美子 2006 年 11 月 3 日現在

「女子十二楽坊 12 Girls Band」

発行年	発売国	CD 名称	収録曲目
2005	中華人民共和国 北京世紀星碟文化伝播有限公司	女子十二楽坊 12 Girls Band 2005 絲綢之旅音楽会	CD１：奇跡、輝煌、在世唯一的花朶、陽光動力、大地軽声、花様年華、山鷹、楼蘭少女、大峡谷、山水。 CD２：達阪城的姑娘、蝶蝶、茉莉花、紫禁城、新古典主義、勝利、大河之舞、敦煌、自由。
2004	Universal Music Limited	女子十二楽坊 Red Hot Classics	CD　：笑傲江湖、敖包相会、S. D. 花園、賽馬、自由、夢里水郷、五拍、節奏之中、勇往直前、劉三姐、雲上的日子、勝利、感謝年華。 DVD：S. D. 花園、相愛己無、魂之舞、都市夜色、節奏之中、康定情歌、漸入佳境、勇往直前、春夢、五拍、情咒、塞琳娜之歌、自由、午夜心境、感謝年華。
2003	珠海特区音像出版社	女子十二楽坊　劉三姐、Girls Band	CD１：劉三姐、翻身道情、地上的星、追逐、無詞、春夢、五拍、節奏之中、相愛己無、女児夢、賽馬、笑傲江湖，魂之舞。 CD２：康定情歌、自由、午夜心境、塞琳娜之歌、奇跡、愛的読法、S. D. 花園、世紀花、夢裏水郷、維多利亜的笑容、快楽穀、東京愛情故事、新古典主義。
2003	珠海特区音像出版社 RockMusicRecord ［TAIWAN］	女子十二楽坊　12 Girls Band 都市夜色	CD１：都市夜色、預知、塞琳娜之歌、嗨！向巴哈致敬、愛的読法、午夜心境、春夢、笑傲江湖、S. D 花園、劉三姐、節奏之中、敖包相会、山水、自由。 CD２：香格里拉、七拍、奇跡、新古典主義、花儿与少年、追逐、相愛己無、阿拉木汗、快楽谷、山水、康定情歌、無詞、魂之舞。 CD３：勝利（維多利亜的笑容）、翻身道情、散漫、感謝年華、五拍、賽馬、勇往直前、雲上的日子、茉莉花、夢里水郷。
2003	台湾 Rock Music Record	12 Girls Band ① 女子十二楽坊現場音楽会	CD　：奇跡、自由、追逐、相愛己無、香格里拉、無詞、魂之舞、山水、五拍、劉三姐、S. D. 花園、嗨！向巴哈致敬、都市夜色、預知、春夢。
2003	台湾 Rock Music Record	12 Girls Band ② 女子十二楽坊現場音楽会	CD　：阿拉木汗、七拍、感謝年華、散漫、快楽谷、翻身道情、新古典主義、勝利（維多利亜的笑容）、康定情歌、花儿与少年、茉莉花、愛的読法、勇往直前、節奏之中、午夜心境、塞琳娜之歌。
2003	中華人民共和国 広東杰盛唱片有限公司	奇跡之輝煌 女子十二楽坊現場音楽会	VCD１：奇跡、自由、追逐、相愛己無、香格里拉、無詞、魂之舞、山水、五拍、劉三姐、花儿与少年 VCD２：阿拉木汗、七拍、感謝年華、散漫、快楽谷、翻身道情、新古典主義、勝利（維多利亜的笑容）。
2003	中華人民共和国 広東杰盛唱片有限公司	奇跡 女子十二楽坊現場音楽会之輝煌	CD　：自由、阿拉木汗、奇跡、七拍、相愛己無、勝利（維多利亜的笑容）、無詞、花儿与少年、劉三姐、香格里拉、新古典主義。
2002	中華人民共和国 広東杰盛唱片有限公司	女子十二楽坊専輯 12 Girls Band	CD　：笑傲江湖、自由、S. D. 花園、賽馬、五拍、敖包相会、節奏之中、勇往直前、維多利亜的笑容、夢里水郷、劉三姐、雲上的日子、感謝年華。 VCD：S. D. 花園、感謝年華、自由、五拍、無詞、午夜心境、相愛己無、春夢、魂之舞、情咒、節奏之中、康定情歌。
2002	中華人民共和国 広東杰盛唱片有限公司	女子十二楽坊　東京愛情故事 12 Girls Band Beautiful Energy	CD　：奇跡、自由、世紀花、香格里拉、五拍、川之流、女儿夢、阿拉木汗、劉三姐、東京愛情故事、山水、七拍、紫禁城、無詞、地上的星。 DVD：奇跡、自由、新古典主義、阿拉木汗、勝利（維多利亜的笑容）。
2005	日本 ミューチャー・コミュニケーションズ	Merry Christmas To You ～女子十二楽坊～	CD　：もろびとこぞりて、クリスマス・イヴ、恋人達のクリスマス、きよしこの夜、ホワイト・クリスマス、恋人がサンタクロース、サンタが町にやってくる、ジングル・ベル、白い恋人達、ラスト・クリスマス、初めてのクリスマス・ハッピー・クリスマス（戦争終わった）。
2005	日本 プラティア・エンタテイメント株式会社	女子十二楽坊 ～The Best of Covers～	CD　：世界に一つだけの花、ドラえもんのうた、涙そうそう、ラブストーリーは突然に、川の流れのように、クロックス、いい日旅立ち、新古典主義、オンリー・タイム、自由、時の流れに身をまかせ、異邦人、花、真夏の果実、地上の星、チャルダッシュ。
2005	日本 プラティア・エンタテイメント株式会社	女子十二楽坊 日本公演 2005 ～Romantic Energy～	DVD：大地の轟き、流転、敦煌、疎勒河、陽関古道、花まつり、新古典主義（交響曲 40 番第 1 楽章、交響曲第 5 番「運命」第 1 楽章、歌劇「セビリアの理髪師」序曲）、五拍、コンドルは飛んでゆく、リール・アラウンド・サ・サン（リバーダンスより）、最初から今まで、異邦人、花、メドレー（地上の星、ラブストーリーは突然に、川の流れのように、世界に一つだけの花）、紫禁城、大峡谷、チャルダッシュ、奇跡、自由。
2005	日本 プラティア・エンタテイメント株式会社	女子十二楽坊～敦煌～	CD　：流転、大地の轟き、敦煌、最初から今まで、花、疎勒河、莫高窟、Romantic Energy、ヤルダンの天女、異邦人、陽関古道、花まつり、月牙泉、コンドルは飛んでゆく、盛唐楽坊、十面埋伏、Lovers。 DVD：敦煌（プロモーションビデオ）、コンドルは飛んでゆく（プロモーションビデオ）、Making in 敦煌、女子十二楽坊「敦煌への旅」。
2004	日本 PlatiaEntertainment USA	Twelve Girls Band 女子十二楽坊 Eastern Energy	CD　：Miracle, Clocks, Liu San Jie, Earthly Stars（Unsung Heroes）, Freedom, Shangri-la, Reel Around The Sun, A Girl's Dream, ForbiddenCity, The Great Valley, Alamuhan, Mountains And Rivers, Only Time, New Classicism。

表1　女子十二楽坊現象にかかわる視聴覚資料一覧（2）

作成：仲　万美子 2006 年 11 月 3 日現在

「女子十二楽坊 12 Girls Band」

発行年	発売国	CD 名称	収録曲目
2004	日本 プラティア・エンタテイメント株式会社	女子十二楽坊 ベストコレクション 日本公演 2004“奇跡”より	CD 1：奇跡、輝煌、シャイニング・エナジー、楼欄少女、五拍、ラブストーリーは突然に、茉莉花、胡蝶、新古典主義（DVD に同じ）、白鳥の湖、川の流れのように。 CD 2：リール・アラウンド・ザ・サン、オンリー・タイム、世界に一つだけの花、紫禁城、山水（DVD に同じ）、大峡谷、メドレー（明日への扉、いい日旅立ち、地上の星）、自由、クロックス。 DVD：奇跡、輝煌、シャイニング・エナジー、楼欄少女、祈り、メドレー（阿拉木汗、七拍、勝利）、茉莉花、胡蝶、新古典主義（交響曲 40 番第 1 楽章、交響曲第 5 番「運命」第 1 楽章、歌劇「セビリアの理髪師」序曲）、白鳥の湖、川の流れのように、リール・アラウンド・サ・サン、世界に一つだけの花、紫禁城、山水組曲（高山流水、春江花月夜）、大峡谷、メドレー、（明日への扉、いい日旅立ち、地上の星）、自由。
2004	日本 プラティア・エンタテイメント株式会社	女子十二楽坊～輝煌～	CD　：大峡谷、輝煌、いい日旅立ち、シャイニング・エナジー、明日への扉、楼欄少女、リール・アラウンド・ザ・サン、オンリー・タイム、茉莉花、時の流れに身をまかせ、幻想、白鳥の湖、火、祈り、胡蝶。 DVD：日本武道館公演映像；奇跡、世界に一つだけの花、香格里拉、劉三姐、明日への扉、楼欄少女、七拍、勝利、川の流れのように、自由、阿拉木汗、花見与少年、魂之舞、五拍、ラブストーリーは突然に、古典主義、輝煌、紫禁城、山水、リール・アラウンド・サ・サン、地上の星、自由、「輝煌」プロモーションビデオ。
2003	日本 プラティア・エンタテイメント株式会社	女子十二楽坊 ～日本発プレミアム演奏会～	DVD：奇跡、自由、五拍、川の流れのように、新古典主義（交響曲 40 番第 1 楽章、交響曲第 5 番「運命」第 1 楽章、歌劇「セビリアの理髪師」序曲）、阿拉木汗、劉三姐、ラブストーリーは突然に、七拍、紫禁城、世界に一つだけの花、地上の星。
2003	日本 プラティア・エンタテイメント株式会社	女子十二楽坊　奇跡	CD　：奇跡、春夢、S. D. 花園、相愛己無、翻身道情、花児与少年、勝利、感謝年華、賽馬、新古典主義、魂之舞、自由。 DVD：奇跡、自由、相愛己無、香格里拉、魂之舞、山水、花児与少年、阿拉木汗、感謝年華、翻身道情、新古典主義、勝利、S. D. 花園。
2003	日本 プラティア・エンタテイメント株式会社	女子十二楽坊 Beautiful Energy	CD 1：奇跡、自由、世界に一つだけの花、香格里拉、五拍、川の流れのように、女児夢、阿拉木汗、劉三姐、ラブストーリーは突然に、山水、七拍、紫禁城、無詞、地上の星。 DVD：自由、奇跡、メンバー紹介。

「東方女子楽坊」

2004	中華人民共和国 中国唱片総公司	東方女子楽坊　光芒 Dong Fang	DVD：光芒、西班牙組曲、Super Star、眉飛色舞、緑光、竹楼情歌、橙色的誘惑、青波箩之恋、北去的候鳥、北去的候鳥、弦起揺香、青春的激蕩、炫動、袖影、草原夢廻、舞指、貝貝阿里郎、 VCD：光芒、橙色的誘惑、北去的候鳥、人物紹介、幕後花袈。

「C-gal」

2005	日本 Nippon Crown	C-gal　天空 The sky air	CD　：シャングリラ、橙色的誘惑、竹楼情歌、初恋（青波箩之恋）袖影、光芒。 DVD：シャングリラ。

「女子国楽坊　Girl's National Music Band」

2005	中華人民共和国 広東杰盛唱片有限公司	女子国楽坊　北京故事 Girl's national Music Band	DVD：凌波仙子、感謝你、夢幻、北京故事、一千零一夜、小城故事、月之光、巴黎之夜、許多敵賛美、星星索、咏漢調、京調。
2005	中華人民共和国 広東杰盛唱片有限公司	女子国楽坊　北京故事 Girl's National Music Band	CD　：京調、夢幻、北京故事、凌波仙子、感謝你、一千零一夜、小城故事、月之光、巴黎之夜、許多的賛美、星星索、咏漢調。 VCD：凌波仙子、感謝你、夢幻、北京故事、一千零一夜、小城故事、月之光、巴黎之夜、許多敵賛美、星星索、咏漢調、京調。
2005	中華人民共和国 広東杰盛唱片有限公司	女子国楽坊　北京故事 Girl's national Music Band	CD　：京調、夢幻、北京故事、凌波仙子、感謝你、一千零一夜、小城故事、月之光、巴黎之夜、許多的賛美、星星索、咏漢調。

「音楽猫」

2005	日本 King Record Co.	音楽猫　Musicat The sky air	CD　：ダンシング・ウイズ・ムジキャット、序曲、愛はかげろうのように、休日、エモーション、時空、涙のバラ、ほろ酔いの楊貴妃、ジュピター、踊り子、対話、英雄主義 DVD：メドレー（序曲～休日～ダンシング・ウイズ・キャット）、涙のバラ。

出典：日本ポピュラー音楽学会（JASPM）第 17 回大会（日時：2005 年 11 月 13 日（日）13：30 ～ 16：30　場所：弘前大学　文京キャンパス　総合教育棟 304 教室）
ワークショップ C：「東アジアにおける民俗音楽のポピュラーミュージック化をめぐって：女子十二楽坊」配布資料、
作成：仲　万美子

や「京劇」に登場する旋律や民族楽器の名曲が含まれている。

〈アレンジ曲の特色〉

たとえば、「女子十二楽坊」の場合に目のつく特徴は、オリジナル曲だけではなく、日本のJ-popのアレンジ曲が多く含まれている。

それに続く、「女子国楽坊」のアレンジ曲では、日本の喜多朗の曲、山口百恵のテレビドラマ「赤い疑惑」の主題歌、そしてインドネシアの民謡、モーツァルトの《ファンタジア》などが含まれている。

「東方女子楽坊」は、韓国のメロディーや日本のテレビ番組のテーマ曲が含まれている。

「音楽猫」は、《ジュピター》など、クラシック系の音楽が含まれている。またヴァイオリンやチェロなどサイレントタイプの楽器担当者が４人がメンバーに加わっている。

〈メンバーの担当楽器〉

「女子十二楽坊」は、グループ名が示すとおり12名全員が民族楽器である。

「女子国楽坊」は、13名で、内４名はキーボード、ベース、ドラム、ギターのポピュラー音楽で使用される楽器が含まれている。

「東方女子楽坊」は、10名で、全員が民族楽器である。

「音楽猫」は、９人で、内５人がクラシック系のサイレント楽器を担当している。

〈コスチューム〉

「女子十二楽坊」は、CDジャケットに見る限りであるが、古代宮廷楽部の女性奏者をイメージしているためか、赤、黒、白などそれぞれ無地で全体的に遠めで見る限り統一感を強調している。

「女子国楽坊」は、女子十二楽坊と同様、無地のベース色に刺繍や袖口などにアクセントカラーが配色されている。

「東方女子楽坊」は、ジーンズに全員異なるカラーのうす地で柔らかい素地の上着を着用している。

「音楽猫」は、ミニスカートにブーツそして、猫をイメージする模様入りのデザインとなっている。

以上のように、明らかに、それぞれ特色を打ち出し、音楽的にも、またビジュアル的にも印象づけ、各グループが判別できるような戦略が見られる。

〈メンバーの音楽体験の特徴〉

表２に見られるように、すべてのグループのメンバーが、音楽学校などの卒業生もしくは在学生であり、すべてプロの奏者をめざす民族楽器の一定以上の演奏能力をもっていることが、メンバーとなる条件とされている。

そして、プローフィールやインタビュー記事からもわかるように、幼少期からその民族楽器を習い始めると同時に、エレクトーンやピアノなど西洋楽器も演奏できるメンバーがふくまれている。

このことは、私たち日本人聴衆者からは、忽然と現れた民族楽器集団のように見えていても、中国の内から見れば、20世紀中期からの民族楽器合奏、そして音楽学校でのプロ奏者養成という長い前提の歴史がベースとなった、次々と続出グループを送り出すことのできる人材が育っていたことを立証する事例と解釈できる。

この〈女子十二楽坊現象〉が生起した、あるいはそれを可能にした文化装置として機能した、文化的・社会的な脈絡を、俯瞰したチャートを以下に掲載しておく。（図２）

表２　各グループの奏者の経歴と担当楽器（１）

作成者：仲万美子　2005年11月3日現在

「女子十二楽坊」

氏名	出身地	出身（在学）学校	受賞暦	担当楽器。
周　健楠　Zhou Jiannan	四川省成都	中国音楽学院（北京）	北京市民族楽器コンクール第１位。	古箏、古琴、中阮。
殷　焱　Yin Yan	四川省成都	中国音楽学院（北京）	南京二胡コンペンション第２位。富士通民族器楽コンクール優秀賞。	二胡、胡琴。
孫　媛　Sun Yuan	山東省青島	中央民族大学（北京）	第１回希望杯民族器楽コンクール第２位	竹笛、巴烏、葫蘆絲、蕭、塤、吐良。
張　爽　Zhang Shuang	遼寧省	中央音楽学殷（北京）	遼寧省器楽コンクール第１位。中国音楽学院器楽コンクール優秀専門賞	琵琶、中阮。
楊　松梅　Yang Songmei	北京	中国音楽学院（北京）	北京市民族器楽コンクール第２位。	揚琴、中阮。
雷　滢　Lei Ying	広西チワン族自治区	中国民族解放軍芸術学院	全国少数民族文芸報道コンクール新人賞、「孔雀杯」少数民族器楽コンクール優秀賞、全軍コンクール第３位。	二胡、独弦琴、巴烏、葫蘆絲、馬骨胡。
馬　菁菁　Ma Jingjing	浙江省杭州	中央音楽学院（北京）	96年七星カップ全国青年演奏家コンクール優秀演奏賞、江南絲竹コンベンションコンクール銀賞。	古箏、揚琴、打楽器、木琴。
詹　麗君　Zhan Lijun	浙江省	中央音楽学院（北京）	台北国際器楽二胡コンクール優秀賞、ARTCUP国際器楽パフォーマンス賞。	二胡、高胡、中阮。
張　琨　Zhang Kun	湖北省	中国音楽学院（北京）	河北省器楽コンクール銀賞。99年文化部専業技術コンクール第２位。	琵琶、中阮。
仲　宝　Zhong Bao	黒龍江省	解放軍芸術学院	河北省迎春発表会優秀演奏賞。	琵琶、中阮
蔣　瑾　Jiang Jin	河北省	中国音楽学院（北京）在	北京市少年宮コンクール金賞。	二胡、京胡、高胡
廖　彬曲　Liao Biqu	広西チワン族自治区	中央民族大学（北京）	広西省第１回「紅銅鼓」コンクール代２位。	竹笛、蕭、葫蘆絲、巴烏、吐良、莪此。
孫　婷　Sun Ting	江蘇省	中央音楽学院（北京）在		二胡

「東方女子楽坊」

氏名	出身地		出身（在学）学校	担当楽器
許　慧　Xiu Hui	江蘇省	1985年５月	中央音楽学院民楽系２年	二胡（ピアノ）
楊　陽　Yang Yang	江西省	1983年６月	中国音楽学院（北京）	二胡（高胡、京胡）
楊　超　Yang Chao	黒竜江省	1984年３月	中央音楽学院民楽系３年	二胡（エレクトーン、ピアノ）
孟　暁旭　Meng Xiaoxu	遼寧省	1983年８月	中央音楽学院民楽系３年	二胡（エレクトーン）
趙　宇婷　Zhao	江西省		中央音楽学院民楽系４年	琵琶（アコーディオン）
楊　瑾　Yang Jin	山西省	1982年８月	中央音楽学院民楽系３年	琵琶（柳琴）
趙　藍　Zhao Lan	四川省	1984年８月	中央音楽学院民楽系２年	笛（長蕭、排蕭、巴烏）
劉　璇　Liu	北京		北京戯曲芸術学院評劇班卒業	笛子（エレクトーン）
史　文倩　Shi Wenqian	浙江省杭州	1981年２月	中国音楽学院（北京）卒業	古箏（エレクトーン）
劉　星　Liu Xing	湖南省	1981年６月	中国音楽学院（北京）卒業	揚琴（打楽器）

表２　各グループの奏者の経歴と担当楽器（２）

作成者：仲万美子　2005 年 11 月 3 日現在

「C-gal」2005 年現在

氏名	出身地	出身（在学）学校	担当楽器
許　慧　Xiu Hui	江蘇省　1985 年 5 月	中央音楽学院民楽系 3 年	二胡（ピアノ）
劉　海静　Liu Haijing	山西省　1981 年11月	中国音楽学院（北京）卒業	二胡
楊　陽　Yang Yang	江西省　1983 年 6 月	中国音楽学院（北京）卒業	二胡（高胡、京胡、ピアノ）
楊　超　Yang Chao	黒竜江省　1984 年 3 月	中央音楽学院民楽系 4 年	二胡、（エレクトーン、ピアノ）
孟　暁旭　Meng Xiaoxu	遼寧省　1983 年 8 月	中央音楽学院民楽系 4 年	二胡、（エレクトーン）
史　文倩　Shi Wenqian	浙江省　1981 年 2 月	中国音楽学院（北京）卒業	古箏（エレクトーン）
楊　瑾　Yang Jin	山西省　1982 年 8 月	中央音楽学院民楽系 4 年	琵琶（柳琴）
王　平吉　Wang Pingji	江蘇省　1983 年 1 月	南京芸術学院卒業	笛
劉　星　Liu Xing	湖南省　1981 年 6 月	中国音楽学院（北京）卒業	揚琴（打楽器）
焦　洋　Jiao Yang	遼寧省　1986 年12月	沈陽師範大学戯劇芸術学校卒業	二胡
趙　藍　Zhao Lan	四川省　1984 年 8 月	中央音楽学院民楽系 3 年	笛（長蕭）
劉　慧　Liu Hui	山東省　1986 年 9 月	中央民族大学音楽校 1 年	琵琶

「女子国楽坊」2004 年現在

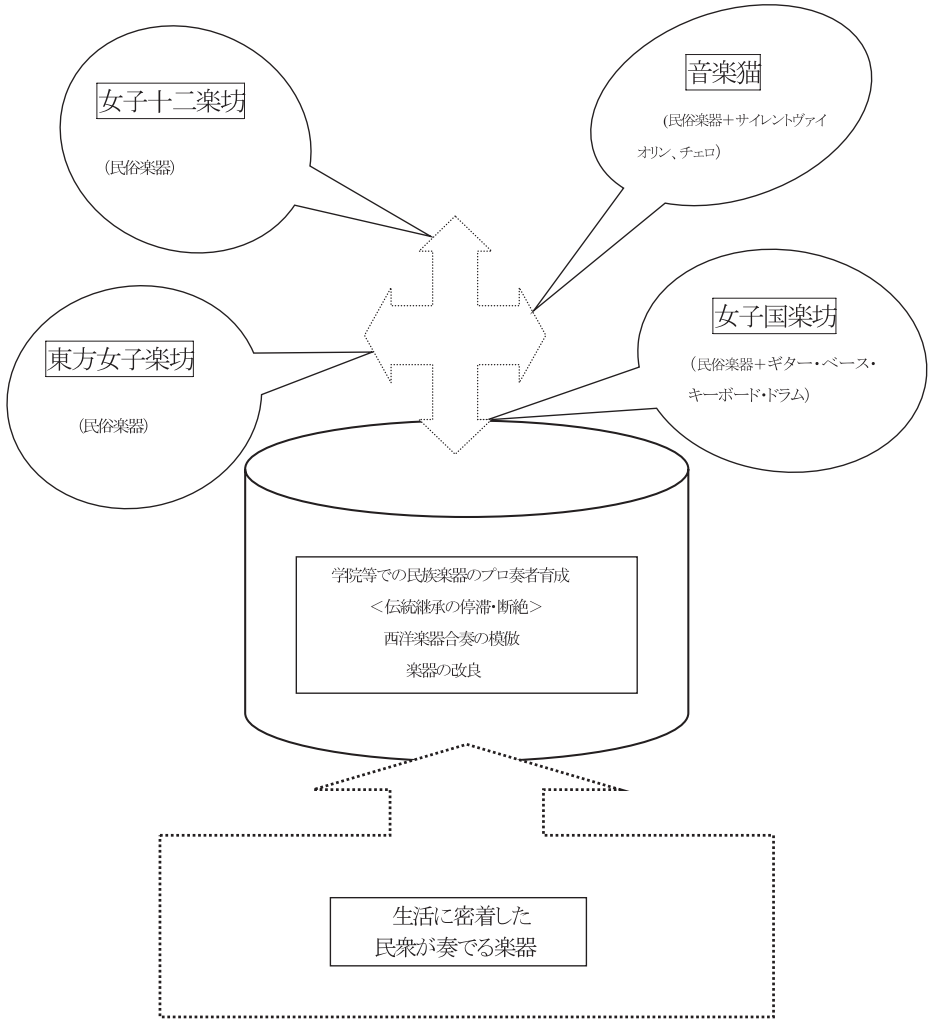
崔　留惠　Cui Liuhui	河南省	中国戯曲学院在学	二胡（京胡）
高　哲　Gao Zhe	河南省	四川音楽学院卒業	笛
趙　娜　Zhao Na	黒竜江省	中国戯曲学院在学	三弦
兪　斐　Yu Fei	四川省	四川音楽学学院	揚琴
蘆　珊　Lu Shan	四川省	四川音楽学院卒業	琵琶
彭　雅萍　Peng Yaping	湖南省	中国戯曲学院	琵琶
方　瑜　Feng Yu	江蘇省	上海音楽学院	古箏
呉　佳音　Wu Jiayin	上海	上海音楽学院	二胡、京胡
冷　静　Leng Jing	四川省	四川音楽学院	二胡
周　信斯　Zhou Xinsi	上海	四川音楽学院	エレキギター
馬　鳴彗　Ma Minghui	内蒙古	首都師範大学芸術系	ドラム
張　思晨　Zhang Sichen	遼寧省	北京現代音楽学院ジャズ系を経て、中国音楽学院音楽学系	ベース
陳　琛　Cheng Chen	山東省	北京現代音楽学院ジャズ系、バンド野草苺に加入	（クラシックピアノ）キーボード

「音楽猫」2005 年現在

周　瑩　Zhou Ying	黒竜江省	中央音楽学院卒業	サイレントヴァイオリン
李　月頴　Li Yueying	吉林省	中央音楽学院在学	サイレントヴァイオリン
張　蕾　Zhang Lei	陝西省	西安音楽学院卒業	サイレントチェロ
趙　蕾　Zhao Lei	山東省	中央音楽学院卒業	サイレントチェロ
趙　聡　Zhao Cong	吉林省	中央音楽学院卒業	琵琶
徐　瑩　Xu Ying	吉林省	中央音楽学院在学	琵琶
于　景媛　Yu Jingyuan	遼寧省	中国人民大学在学	笛
陳　悦　Chen Yue	浙江省	中国音楽院大学院	笛、蕭
趙　暁霞　Zhao Xiaoxia	四川省	中央音楽学院卒業	古箏

出典：日本ポピュラー音楽学会（JASPM）第 17 回大会（日時：2005 年 11 月 13 日（日）13：30 ～ 16：30　場所：弘前大学　文京キャンパス　総合教育棟 304 教室）
ワークショップ C：「東アジアにおける民俗音楽のポピュラーミュージック化をめぐって：女子十二楽坊」配布資料

作成：仲　万美子



作成：仲万美子 2005 年 11 月 3 日

図 2　〈女子十二楽坊現象〉出現までの流れとメインメンバーの楽器構成

お　わ　り　に

以上本稿では、21 世紀に入り、日本、中華人民共和国、台湾、そして欧米へと活動の場を展開している「女子十二楽坊」、それに続いて、出現している「東方女子楽坊（C-gal）」「音楽猫」「女子国楽坊」の各グループの音楽活動を〈女子十二楽坊現象〉として捉え、その背景にある文化的・社会的・政治的な文脈に位置づけながら、それらの「商品」として売り出されることとなった民族音楽のポピュラー化現象の分析、考察を試みた。

現在起こっている〈女子十二楽坊現象〉は、21 世紀初頭の現代ポピュラー音楽の歴史の一こまを彩るものであるやも知れないが、図 2 のチャートに見られるように、その背景を詳細に観察して行くと複雑な背景が浮かびあがってくる。言い換えれば、唐突に出現したものではなく、中国において西洋音楽文化と接触した近代中国音楽史における、西洋音楽と民族音楽との文化触変（acculturation）の過程にみられる文化的・政治的・社会的コンテクストに大きく

影響を受けながら展開してきた文化現象の一つの結果であることが明確となった。

これら〈女子十二楽坊現象〉の今後の展開を経過観察することだけでなく、日本ポピュラー音楽学会第17回大会ワークショップ「東アジアにおける民俗音楽のポピュラーミュージック化をめぐって」における他の問題提起者により提示された〈しまうた〉や〈津軽三味線〉のブーム現象との差異など、別項で言及したいと考えている（注1参照）。また、企業戦略の側面からの考察として、この「女子十二楽坊」の脱湾プロデューサー王暁京へのインタビューなども含めて、文化現象を生み出す内側からの視点と研究者などが観察する外側からの視点との相違についても描き出すことが今後の課題であることは云うまでもない。

註

1）筆者は、2005年11月13日に弘前大学で開催された日本ポピュラー音楽学会第17回大会でのワークショップC「東アジアにおける民俗音楽のポピュラーミュージック化をめぐって」の問題提起者として〈女子十二楽坊現象〉をテーマに報告をおこなった。本稿はその報告原稿の一部に加筆したものである。また同ワークショップでは、高橋美樹氏が、奄美諸島、沖縄、日本本土、世界へと波及した〈しまうた〉、そして山田由貴子氏が、高橋竹山や吉田兄弟などの演奏が現代の若者にも浸透している〈津軽三味線〉を事例に問題提起を行い、小川博司氏が音楽社会学の立場からコメントされた。なお、本研究には、独立行政法人日本学術振興会科学研究費・基盤研究B「近現代華北地域における伝統芸能文化の総合的研究」（2005年度、課題番号：17320059　研究代表者：氷上正）の成果の一部が含まれている。

2）台湾出身の江文也のように、日本、そして北京で活躍し、民謡を多彩に取り入れた音楽作品を創作し、世界に名を馳せた作曲家も登場した（仲　2004）。

3）このような中国での流れは、同様に、時期を同じくする日本でも、明治、大正、昭和前期にかけ、見られる（仲　1989、1996）。

4）2005年夏の調査では、安康市漢浜区で見学した安康梨園道情皮影劇団の鼓師も50代2人、60代5名、70代1名といった高齢者が中心である。しかし、一方で、洵陽県文化旅游局で上演された洵陽皮影隊のメンバーは30代2人と40代1人で、本業は農業である業余劇団であり、70から80歳代の老芸人の方も存命であり、後世への継承の一面がみれた。これら、調査の概要などについては、『中国都市芸能研究』第四輯に氷上正、千田大介、山下一夫氏らによって報告されている（中国都市芸能研究会編2005）。

〈主要参考文献表〉

中国都市芸能研究会編　2005『中国都市芸能研究』第四輯。

東（尾高）暁子　1994「北京大学音楽研究界の活動実態と新文化運動」『洗足論叢』23：135－146.

岩村沢也　1993「ユニークな『民衆音楽』としての盆踊り」日本ポピュラー音楽学会第5回大会口頭発表資料。

女子十二楽坊　2004『女子十二楽坊』東京：講談社。

種田展子　2005「二胡の音色（ねいろ）を擦（ひ）く技と聴く心」同志社女子大学学芸学部音楽学科音楽文化専攻音楽文化コース2004年度卒業研究。

増田　聡　2005『その音楽の〈作者〉とは誰か』東京：みすず書房。

仲万美子　1989「日本における『音楽研究』から『音楽学』への移行の足跡」『音楽学』35（1）：44－53.

1993「音文化の坩堝、中国」『平成3年度、第1回大阪・アジアスカラシップ活動報告書』25－47.

1996a「『通俗音楽』および『民歌』『民謡』概念のダイナミズム――中国・日本における研究（創作）活動の流れ」『文部省国際シンポジウム　アジア諸民族音楽文化のダイナミズム――伝統と変容　報告書』大阪：国立民族学博物館、222－229.

1996b「日本・中国・西洋音楽文化の重層的対話」
大阪大学大学院文学研究科博士（文学）学位取得論文（1997）。

1998a「日中キリスト教音楽受容に

みる文化交差の多層性」『異文化交流と近代化』
東京：大空社、p. 228－237.
1998b “The reception of popular music in the early stages of acculturation in China : with particular reference to jazz” The 1997 IASPM Conference Kanazawa, *Popular Music ; Intercultural Interpretations*、121－133.
2000 「近代都市・東京に出現したオーケストラの『響』―― その担い手・演奏空間・聴衆 ――」『音楽研究』相愛大学音楽研究所編、6 ：. 45－64.
2002 “Cultural Exchange” In *The Garland Encyclopedia of World Music* 7 ： 49－52.
2004 「作曲家の音楽活動空間と帰属文化との関係性 ―― 江文也と山田耕筰を事例に ――」『同志社女子大学学術研究年報』55：33－47.
2005a 「『色を聴き音を見る』上演空間 ―― 譚盾のホールオペラ《TEA》に映し出された音風景 ――」『民族藝術』第 21： 153－159.
2005b 「女子十二楽坊」他 （翻訳）『チャイニーズカルチャーレビュー』Vol. 2、265、東京：好文出版。
高橋美樹　2003a 「戦後沖縄における民謡歌手の変容 ―― 世代別活動スタイルの比較を通して」『ポピュラー音楽研究』 6 ： 17－37.
2003b 「〈しまうた〉にまつわる諸概念の成立過程 ―― 奄美諸島を中心として」『立命館言語文化研究』15（2）：149－161.
2005 「東アジアにおける民俗音楽のポピュラーミュージック化をめぐって：しまうた」日本ポピュラー音楽学会第 17 回大会でのワークショップ C 問題提起者口頭報告配布資料。
譚盾 / 石田一志他　1997「譚盾、陳其鋼に聞く、二十一世紀へのアジアの熱い息吹き」『音楽芸術』 3 ： 35－43。
トインビー、ジェイソン　2004 『ポピュラー音楽をつくる　ミュージシャン・創造性・制度』安田昌弘訳、みすず書房。
山田由貴子　2005a 『21 世紀の津軽三味線の音世界 ―― 津軽三味線ブームの実像』同志社女子大学学芸学部音楽学科音楽文化専攻音楽文化コース 2004 年度卒業研究。
2005b 「東アジアにおける民俗音楽のポピュラーミュージック化をめぐって：津軽三味線」日本ポピュラー音楽学会第 17 回大会でのワークショップ C 問題提起者口頭報告配布資料。
張　一帆　2004 『女子十二楽坊の素顔』別冊聴く中国語、東京：日中通信社。
張　競　2004 『文化のオフサイド / ノーサイド』東京：岩波書店。

〈中国語文献〉

北京大学歌謡研究会　1924－ 『歌謡』 北京：北京大学日刊課 （1924 年 1 巻 1 号～ 1938 年 3 巻 13 号）（1985 年、復刻版（ 3 冊本、中国民間文芸出版社）
胡　文娟　2004 『女子十二楽坊の素顔』別冊聴く中国語。
羅　忠鎔編　1997 『現代音楽鑑賞辞典』（中国語）北京：高等教育出版社。
梁　茂春　1994 『中国当代音楽（1949－1989）』北京：北京広播学院出版社。
汪　毓和　1991 『中国現代音楽史綱（1949－1986）』北京；華文出版社。
冼　星海　1989 『冼星海全集』広東口頭教育出版社。
曾　遂今　1993 『現代通俗歌曲観念与技法』四川教育出版社。
1997 『音楽社会学概論』文化芸術出版社。
2002 『中国大衆音楽』北京広播学院出版社。
2004 「音楽創造的霊感：従音楽的自然伝播至技術伝播」『中国音楽伝播論壇』北京広播学院出版社。
沉　睡　2005 『廃墟の花　揺瀼・歴史・文化』中国青年社。